





目覚めて窓を開けると
そこにあるのは
いつもの青
静かな湖面と
まだ小鳥たちの声しか聞こえない
静かな、平穏な風景

これが.....
ボクが知る身近な景色だ。



仰げば、ずっとそこに立ち続けている大樹。
きっとボクの知らない世界を
あの木は知っているのだろうけど
とても残念なことに
ボクは彼の言葉を聞くことが出来ない.....
彼と話をすることが出来るなら
きっとボクの世界は変わるのだ。

いや、変わるって思いたいだけなんだ。
それは確信ではなく、ただの願望.....
そうであればいいというねがい。



アンジェラはボクの姉だという。

僕の世界にアンジェラ以外に話し相手なんかいないから

ボクは疑う事もなくアンジェラを姉だと信じている。

ただ.....

ときどき、彼女はなにかが違うのだと感じてしまう。

そんなことを言うと

アンジェラは少し寂しそうに笑いながら

「あなたは男の子だから」なんて当たり前のことを言う。



「決して外に出てはダメよ？」

それは幼い日から言い聞かされ続けている言葉だ。

この森深くの小さな家と周囲しかボクは知らない。

「ここに居れば安全だから」

「あんぜん？」

きけんをしらないボクに安全は解らない。

「こわいことが起こらない」

そう言ってアンジェラは話し出す。

もう何度も聞かされている僕の知らない世界の話だ。



「ずっと昔、そう……窓の外の木が若木だったころのこと……

私には大切な友達がいたの。

そのころは多くの人々と村で暮らしていたわ。

あのときの村は、もうないのでしょけれども

私は覚えている……村人は友人を裏切った。

彼女は頭の痛みを訴えた男から

その苦痛を和らげてあげただけなのに

彼女は数日後、広場に連れて行かれて

そのまま火にあぶられてしまった。

火に焼かれる苦痛が解るかしら？

小さなヤケドでも痛いのに

彼女は命の火が消えるまで

真っ赤な炎につつまれていたの……」

遠い目をして語るアンジェラには申し訳ないけれど

ボクには解らないことばかりで

いつも長い物語の途中で居眠りをしてしまうんだ。



いつものように話の途中で眠ってしまったボクにアンジェラは珍しく怒っていた。

「そんなに恐ろしい目に遭いたいのなら、この湖が見えなくなるまで歩いていきなさい。きっと私の悲しみが解るから」



アンジェラには悪いのだけど僕は外に出てもいいのだと言われて嬉しかった。

見慣れた青い湖面の色が変わる。

もうすぐ

もうすぐ湖は途切れる。

ここを先に進むなら

今までの言い付けを守るなら

ボクは湖面が見える道を探すか、もとの道に戻るしかなかったんだけど……でも今日は違う。

ボクは湖を離れて外を目指す。

恐怖なんかなかった。

歩きつめた足が少し痛むけれど

それさえ忘れてしまえるほど心は浮きだっていた。



たどりついた森の外は
草いきれに覆われて
虫の音が家の周囲とは違っていた。

ざわざわと騒がしい音
風が運んでくる
ボクの知らない音

どこからか聞こえる声は
アンジェラのものじゃない。

ボクの知らない声たち.....



硬い地面
知らない草花.....

ボクは怖いとは感じられなかった。
この世界のどこかで
誰かが炎に焼かれたのだと言われていても
ボクには信じられないほど世界は綺麗だった。

ざわめきも、誰かの声も、ボクは興味しか湧かない。

「怖い」というアンジェラの気持ちは余計に解らなくなった。



帰宅を待っていてくれたアンジェラに

「とても楽しかった」とボクは感じたままの言葉を伝えた。
そしたらアンジェラは「おかえりなさい」も言ってくれなくて
怒ってボクを見তেくれなくなった。
どんなに話しかけてもアンジェラは何も言ってくれない。



月が綺麗な夜
アンジェラは花畑へと出て行く。
それは、いつものことで
夜の花に話しかけて
聞こえない花の声と話すアンジェラも
ボクには見慣れたものだった。

だけど今のボクは知っている。

アンジェラが怖いという世界は外に出ても存在しなかった。

少なくともボクは怖いとは感じなかったのだ。



花と話し込んでいても少しの物音に怯えるアンジェラ。
怖いというくせに何かからボクを守ろうとするかのように
前に立ちはだかるアンジェラは.....
ボクの姉なのだからと思いこんでいた。

ボクには聞こえない声で話す花たちと話し込む姉に
何度も感じていた感覚がわきあがる。

アンジェラは「なにかがちがう」んだ。

女の子だからじゃあなくて、アンジェラはボクと違うんだ。



「大丈夫……だいじょうぶだと花が教えてくれる」
自分に言い聞かせるように呟くアンジェラ
いつもボクを守ろうとするアンジェラは外にでることさえ怖いのだ。
月の綺麗な夜だけ花々と話をして楽しそうにする。
だけど、その笑顔は少し寂しそうで
ボクに向けて笑うときほどじゃあないと気付いている。



ねえ、アンジェラ

怖かった記憶は消えないのでしょうか？

それくらい怖くて、恐ろしい思いをしたんだよね。

きっとアンジェラは焼かれたトモダチみたいに

いつか自分も焼かれてしまうと思い込んでいるからでしょう？

だけどボクには外に出てもいいといった。

見てきたら良いと言った。

心配性なアンジェラが本当に危険だと思っていたら言うはずがない。

ボクは焼かれないうって思っていたはずなんだ。

ボクはアンジェラとは違うんだよね。

それでも外には出るなというのは.....

ボクが離れることを恐れているからなのかな？

アンジェラしか知らない、話した事がないボクなのに。



朝日が昇れば花の声は聞こえないというアンジェラ。
だけどボクが望めば花園に居る事くらいは許してくれる。
アンジェラが恐れるものは解らないけれど
少なくとも、ボクは何処にも行かないのだと答えておこう。
外の世界は怖くないし、綺麗だったけれど
あの、ざわざわとした雰囲気も嫌いじゃないけれど
だけど外の世界に行く理由をボクは持っていないんだよ。



「だから怖くなんかないんだよ」
ボク言葉にアンジェラは寂しそうに笑った。
「ずっとボクは傍に居るんだから」
「それしか、あなたには道はないのだから」
そうしてボクはアンジェラの笑顔の理由を知らないまま
彼女の傍に居る事を約束した。
アンジェラはボクとは「なにかがちがう」
だから外に出ると村人という何かに焼かれると思い込んでいる。
そんな悲しい記憶は少しでも忘れていて欲しいから

だからボクは傍に居ようと決めたんだ。

「かつて、焼かれてしまった友人は私を天使だと思いこんでいた。

だからアンジェラなのだと呼んでくれた。

焼かれながら私を呼ぶ声が耳を離れない……

私は天使を名乗りながら此処で暮らしているの」

アンジェラの名前への思いは小さな声で

ボクには聞き取れなかった。



その日、アンジェラは言い聞かせるように話してくれた。

「あなたは取替え子だから……」

それはボクの知らない言葉で、意味も解らない。

「金の髪と青い瞳

なのに揺り籠は置き去りにされていた。

きれいな赤ん坊は妖精が持っていくの。

入れ替えに小さな苗木を置いて行くの。

苗木は育ちにくいけれど大切に育てることができたら富を招く……

でも入れ替えられた子供は帰れない。

帰っても不幸な道しか用意されていないのだから」

それは知らない話で、ボクにはどうでもいい話だった。

だって、アンジェラは笑いながら泣きそうな声で言葉を紡いだんだ。

理由なんか要らない。

アンジェラしか知らないボクはアンジェラの気持ちさえ解らないまま
ずっと彼女の傍に居る……

それが、ボクの望んだ、選んだ……ボクの居場所。

この寂しい、きれいな湖畔を居場所を選んだアンジェラ。
過去に囚われる彼女の傍に
ボクが居る事で本当に笑ってくれる日が来るのだとしたら
アンジェラしか知らない僕は此処に居る。

撮影対象となった人形の紹介



今回の人形の紹介をさせていただきます。

アンジェラ

ヘッド

販売元・PARABOXのソフビ製

アンジェラヘッド+ピクシー耳パーツ

ボディ

オビツ 6 0 球体関節ボディをオビツ 5 5 の腕、足と交換

ハンドパーツ、足首パーツはオビツ 6 0

ボク

ヘッド

販売元・PARABOXのソフビ製

アンジェラヘッド

ボディ

オビツ 5 5 の腕、足を 6 0 と交換

ハンドパーツ、足首パーツはオビツ 5 5

ヘッド塗装・ボディカスタム : 猫屋雑猫

僕らの居場所

<http://p.booklog.jp/book/36007>

著者：猫屋雑猫

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekoyazathuneko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36007>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36007>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.